

## 現代フランス語に於ける定冠詞と地名に 関する考察 ——島名を中心として——

今 田 良 信

### I 序 論

#### § 1 はじめに

現代フランス語において、地名に先立つ定冠詞(以後 AD で示す)の有無の用法は — 例えば、国名・地方名・河川名などは必ず AD を伴い、郡市名は無冠詞(以後 SA で示す)というように — 個々の範疇内では大体統一されている。しかし、同じ地名でもその統語上の条件によって、AD の有無は変わりうるので、なかなか複雑である。ところで、地名の個々の範疇のうち、島名だけは例外であって、同じ範疇内に AD のものと SA のものが存在する。どうして島名だけ AD の有無が区々なのかという疑問もさることながら、その基準自体が判然としていない。そこで、本稿では現代フランス語における島名の AD の有無の区別はいかなる基準に依っているのか、また、それは他のロマンス語と比べてどんな特徴があるのか、<sup>(注1)</sup>そして、地名全体の基準は何に基づいているのか、それと島名の基準はどう関係しているのかなどについて、諸学者の意見もできるだけ参考にしつつ、自分なりの解決を計ってみたい。

#### § 2 問題の所在

現代フランス語には、現代イタリア語と同じく島名に AD の付くものと SA のものがある。そこで、その区別に関する諸学者の意見をいくつか見てみた。Anglade, J. (1930)にはこのように書かれている。

“Les noms de pays, provinces, grandes îles prennent l'article. ... Cependant plusieurs noms de grandes îles ne prennent pas d'article: ... Les noms de petites îles ne prennent pas d'article.” <sup>(注2)</sup>

ここでは、島の大小という基準しか上がっておらず、しかも、「大きい」島でも AD の付くものと付かないものがあるようだが、その区別には触れられていない。また、何よりも大小の基準はどこに置けばよいのであろうか。

次に Grevisse, M. (1980)によれば,

“L'article s'emploie, en général, devant les noms de grandes îles ... Mais les noms de petites îles d'Europe et les noms masculins d'îles lointaines ne prennent pas l'article: ...”<sup>(注3)</sup>

となっており, Anglade の意見より少し詳しくなって, 新たな基準が上がっている。しかし, 「大きい」島でも AD の有無があることには触れられていない。更に, von Wartburg, W. & Zumthor, P. (1958) と Martinon, Ph. (1927) を調べてみると,<sup>(注4)</sup> 上記の基準に「女性の」「外国に属する (exotique)」といった基準が加わっている。多少歴史的なこと, 心理面も考慮されてはいるが, 不十分である。以上のことから言えるのは, 学者によって基準の取り方がバラバラであり, それ故何を基準と考えてよいのかわからず, 当然地名全体との関係もわからないということである。それどころか, 基準そのものの信頼性も問題である。また, 前置詞の後での AD の有無や「場所・方向」の前置詞の選択についても, 不十分な点があるので, 詳しく調べてみたい。

### § 3 資料と方法

資料は, 例の数も豊富で, その上比較的文体の偏りのない, フランスの社会科地理教科書 7 冊を使用し,<sup>(注5)</sup> 加えて Petit Robert 2 (1977) を参考にした。また, 客観的方法論としては, 統計学の検定法である  $\chi^2$  検定法及び必要に応じて要因配置計画法を用いた。<sup>(注6)</sup>

### § 4 手順

#### (1) 有効例の選別と分類

上記の資料から, 約1300の例を採取し, 本稿の目的を果すのに有効な例を得るため, まず, ほんの僅かの例外を除いて, すべて SA で現れる (i) l'île ~ (ii) l'île de ~ (iii) les îles ~ (iv) les îles de ~ の型の島名を除き,<sup>(注7)</sup> 必ず AD を伴って現われる群島名及び, SA になり易い地図・表・書名・見出しのタイトルとなっている島名を除く。そして, 島名が対置・列挙及び内訳を示しているものを別にした上で, 残りの例を「前置句であるか否か」(以後 [±prép.] で示す) 及び「修飾語句(形容詞や関係節など)が付いているか否か」(以後 [±mod.] で示す) という条件によって分類した。

#### (2) AD の島名・SA の島名の決定

次に, [-prép.][-mod.] で AD となっている島名を AD の島名・SA となっている島名を SA の島名とし, 更に対置・列挙及び内訳の例などを利用して,<sup>(注8)</sup> AD・SA の決定できた島名は AD の島名19・SA の島名22である。<sup>(注9)</sup> そこで, AD の島名と SA の島名をそれぞれひとまとめ

にして[±prép.][±mod.]によって分類して、AD・SAの分布状況を示したのが《表1》である。

《表 1》		[- prép.][- mod.]	[- prép.][+ mod.]	[+ prép.][- mod.]	[+ prép.][+ mod.]
AD の島名	AD	145	5	109	3
	SA	0	0	56	0
SA の島名	AD	0	0	0	0
	SA	58	2	113	3

### (3) 要因の設定

本論で島名のADの有無の基準を考察するにあたって、その要因となると考えられ、かつ上記の資料から調べることの可能な要因すべてを、諸学者の意見から設定してみた。

F<sub>1</sub>：島の面積(島の物理的大小)<sup>(註10)</sup>

F<sub>2</sub>：ヨーロッパの(国々に所属する)島であるか否か(以後[±europ.]で示す)

F<sub>3</sub>：フランスに属する(すなわち、フランスの県或は領土の)島であるか否か(以後[±franç.]で示す)

F<sub>4</sub>：島名の文法性が男性か女性か(以後[mascul.], [fémin.]で示す)

以上は単独の要因であるが、これだけでは不十分なので、単独の要因を2つずつ組み合わせた交互作用という複雑な要因も考察してみる必要がある。それには、F<sub>1</sub>×F<sub>2</sub>, F<sub>1</sub>×F<sub>3</sub>, F<sub>1</sub>×F<sub>4</sub>, F<sub>2</sub>×F<sub>3</sub>, F<sub>2</sub>×F<sub>4</sub>, F<sub>3</sub>×F<sub>4</sub>という組み合わせが考えられるが、このうちF<sub>2</sub>×F<sub>3</sub>は理論上無理な個所があるので除外する。<sup>(註11)</sup> また、F<sub>1</sub>×F<sub>2</sub>～F<sub>4</sub>は、他の組み合わせと異なり、 $\chi^2$ 検定だけでなく、筆者独自のやり方で吟味を行なうが、これは後で述べる。

## II 本 論

### 〔1〕 島名についての資料の分析と考察

#### § 1 [±prép.]について

[±prép.][±mod.]という条件のもとで、島名のAD・SAがどのような傾向を示しているかを知らために、《表1》を分析してみた。結果は《表2》の通りである。AD・SA間で有勢な方を記号で示し、有意差があれば\*印を付した(以後この印はすべて有意差のあることを示す)。また、カッコ内は例外の数である。

《表 2》	[- prép.][- mod.]	[- prép.][+ mod.]	[+ prép.][- mod.]	[+ prép.][+ mod.]
AD の島名	*AD ( 0 )	*AD ( 0 )	*AD (56)	AD ( 0 )
SA の島名	*SA ( 0 )	SA ( 0 )	*SA ( 0 )	SA ( 0 )

この表から、SA の島名は常に SA で現われることがわかる。しかし、AD の島名は、[+prép.] [-mod.] のところで、AD が有意になってはいるが、例外の数がかかなり多い。やはり、これは [+prép.] という条件のためと考えられる。そこで、[+prép.] を更に細かく前置詞別に分析したのが《表 3》である。但し、斜線のところは例が見当らなかったことを、 $\phi$  印は例が存在しないことを示す。[+

《表 3》	AD の島名	SA の島名
à	*AD ( 0 )	*SA ( 0 )
après	AD ( 0 )	
avec	AD ( 0 )	SA ( 0 )
de	*AD (19)	*SA ( 0 )
en	*SA ( 0 )	$\phi$
entre	AD ( 0 )	SA ( 0 )
par	AD ( 0 )	
pour	AD ( 0 )	SA ( 0 )
sauf		SA ( 0 )
sur	AD ( 0 )	
vers		SA ( 0 )

prép.] の島名の問題は大きく分けて 2 つあるが、先ずひとつは AD の島名における de の後での AD の有無である。《表 3》でも、AD に有意差はあるものの例外も多い。従って、少なくとも von Wartburg, W. & Zumthor, P.(1958) に述べられているように簡単には片付かない。<sup>(注12)</sup> ただ、de の後の AD の有無の複雑さは従来指摘されてきているのであるが、それには de 自体の意味の違い<sup>(注13)</sup> や de の前の名詞<sup>(注14)</sup> 及び後の地名の範疇<sup>(注15)</sup> も関係しているようなので、ここで詳しく述べるわけにはゆかない。そこで、もうひとつの問題である「場所・方向」を示す場合の前置詞の選択について、今まで指摘されていなかったような点について述べてみたい。

Grevisse, M. (1980)はこのことについて、

“Devant les noms féminins de grandes îles proches ou lointaines, pour indiquer le lieu (situation ou direction), on emploie en: en Sardaigne, en Islande, en Nouvelle-Guinée. — Toutefois on dit: à Terre-Neuve. — Devant les noms féminins de petites îles lointaines, on emploie à la: à la Réunion, à la Martinique. — Devant les noms de petites îles d’Europe et devant les noms masculins de grandes îles lointaines, on emploie à: à Malte, à Chypre, à Cuba, à Madagascar.”<sup>(注16)</sup>

と述べ、朝倉(1980)では「冠詞をとる島名。大きな島の名は en : en Corse, en Islande, en Nouvelle-Guinée, etc. 小さな島の名は à : à la Réunion, à la Jamaïque, à la Martinique. 群島名 : aux Antilles, aux Philippines. 無冠詞の島名 : à Malte, à Majorque, à Madagascar, à Terre-Neuve.”<sup>(注17)</sup> となっている。両者の基準の差はここではひとまず置くとして、筆者の調べた範囲では、「場所・方向」の前置詞の選択は上記に述べられているよりももっと自由 — 見方を変えれば、もっと複雑 — である。それは次のような事実に見ることができる。筆者の採取した例の中には、à la

となるとされている島名が en を取ったり、 en を取るとされている島名が à la となっている例が少なからず見出された。

ex. Elles totalisent près de 1200000 habitants: plus de 460000 hab. en Réunion, .....  
Plusieurs régions géographiques peuvent être distinguées en Martinique.

à la と en の両方の例が出てきた島名について、その数を示すと《表 4》のようになる(島名は面積順)。いずれの島名も、どちらか一方に有意差は見られない。また、Martinon, Ph. (1927)によれば、稀な場合と前置きしながらも、dans la Corse という例も上がっている。<sup>(注18)</sup> それに島の大小と前置詞の関係にも難点はある。<sup>(注19)</sup> このような理由から、前置詞の選択は、少なくとも上記にあげられたように 3～4 の枠だけに押込むことはできないのははっきりしたと思う。そこで、得られた事実をまとめておく。

《表 4》	à la	en
Sicile	3	6
Jamaïque	1	1
Réunion	5	1
Guadeloupe	4	5
Martinique	4	6

《表 5》	文法性	型	例
AD の島名	f.	(i) à + AD + ～	Désirade, etc.
		(ii) en + SA + ～	Corse, Sardaigne, Nouvelle-Calédonie, etc.
		(iii) (i)と(ii)の両方	Sicile, Réunion, etc.
	m.	à + AD(au) + ～	Groenland, etc.
SA の島名	f.	à + SA + ～	Bornéo, Malte, etc.
	m.	à + SA + ～	Terre-Neuve, Formose, etc.

これらの区別の基準と文法性とは関係がありそうであるが、(i), (ii), (iii)が何によって分かれているのかは、現段階では残念ながらわからない。

§ 2 島名の AD・SA を区別する基準について

(1) 単独の要因

準備がすべて整ったところで、島名の AD の有無の基準について考察する。ここで対象となるのは[－prép.][－mod.]の例だけである。まず、これまで参照したどの学者も必ず触れている島の大小という要因(すなわち F<sub>1</sub>)を調べてみよう。島名を AD・SA と共に面積順に並べたのが《表 6》である。

《表 6》		島 名	面積 (km <sup>2</sup> )			島 名	面積 (km <sup>2</sup> )
1	AD	Groenland	2175600	22	AD	Nouvelle-Calédonie	22139
2	AD	Nouvelle-Guinée	887695	23	AD	Jamaïque	10962
3	SA	Bornéo	755000	24	SA	Chypre	9251
4	SA	Madagascar	594180	25	SA	Porto-Rico	8897
5	SA	Sumatra	473606	26	AD	Corse	8681
6	AD	Nouvelle-Zélande	268675	27	AD	Crète	8259
7	AD	Grande-Bretagne	217800	28	SA	Trinidad	4828
8	SA	Java	132174	29	AD	Réunion	2510
9	SA	Cuba	114524	30	AD	Guadeloupe	1779
10	SA	Terre-Neuve	110681	31	SA	Zanzibar	1658
11	SA	Luçon	104687	32	SA	Rhodes	1398
12	AD	Islande	102846	33	AD	Martinique	1090
13	AD	Irlande	84525	34	SA	Tahiti	1050
14	SA	Haïti	78000	35	SA	Curaçao	413
15	AD	Terre de Feu	77000	36	SA	Malte	316
16	SA	Ceylan	65610	37	SA	Ré	81
17	AD	Tasmanie	64646	38	SA	Bora-Bora	39
18	AD	Spitzberg	62050	39	AD	Désirade	27
19	SA	Formose(Tai-Wan)	35961	40	SA	Saint-Barthélemy	25
20	AD	Sicile	25460	41	SA	Délos	3.6
21	AD	Sardaigne	24089				

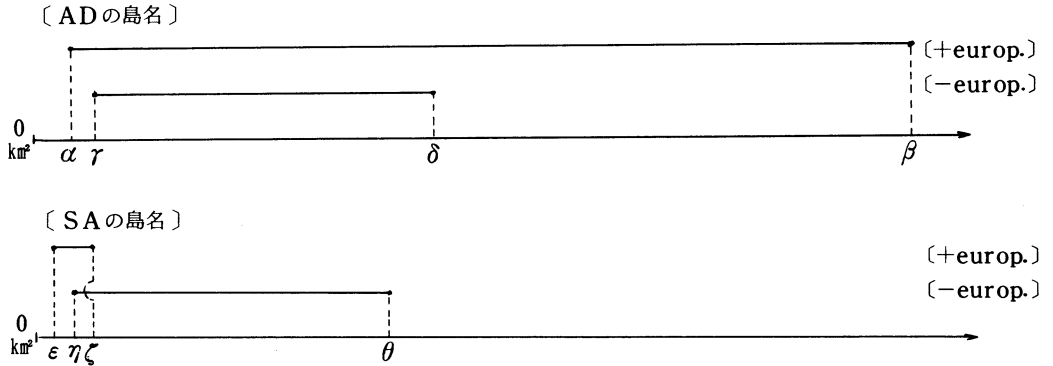
この表に見られるように、面積は必ずしも島名の AD・SA には関係していないようである。少なくとも、客観的物的に「大きい島」と「小さい島」とを区別する基準を見出すことはできない。従って、 $F_1$  は要因とは認められまい。次に、 $F_2 \cdot F_3 \cdot F_4$  それぞれと AD・SA との関係を検定してみたところ、 $\chi^2$  の値はそれぞれ 4.45, 1.92, 3.92 となった。この結果から、 $F_2$  と  $F_4$  が要因として認められることになる(なお、この両者の要因としての効果の大きさは  $F_2 > F_4$  である)。

## (2) 複雑な要因 — 交互作用について —

単独の要因の効果がわかったので、今度は要因同志の交互作用を吟味してみよう。 $F_1 \times F_2$ ,  $F_1 \times F_3$ ,  $F_1 \times F_4$  の吟味の仕方は、先にも述べた通り、少々特異なので、 $F_1 \times F_2$  を例に取っ

て説明しよう。

〈図1〉



〈図1〉は、ADとSAに分けて面積と[±europ.]との関係を示したものである。面積は左端が0 km<sup>2</sup>で、右へ行くほど大きくなっている。なお、紙面の関係で、面積を示す線と実際の面積との割合が、正確には合っていないことを断っておきたい。α～θ点はそれぞれ次のような点を示している。

- α : [+europ.]で最小のADの島名 Désirade, 27km<sup>2</sup>
- β : [+europ.]で最大のADの島名 Groenland, 2175600km<sup>2</sup>
- γ : [-europ.]で最小のADの島名 Jamaïque, 10962km<sup>2</sup>
- δ : [-europ.]で最大のADの島名 Nouvelle-Guinée, 887695km<sup>2</sup>
- ε : [+europ.]で最小のSAの島名 Délos, 3.6km<sup>2</sup>
- ζ : [+europ.]で最大のSAの島名 Chypre, 9251km<sup>2</sup>
- η : [-europ.]で最小のSAの島名 Zanzibar, 1658km<sup>2</sup>
- θ : [-europ.]で最大のSAの島名 Bornéo, 755000km<sup>2</sup>

ここで注目すべきなのは、〔ADの島名〕のα～γ間の島名と〔SAの島名〕のζ～θ間の島名である。なぜなら、このうち前者にある島名は[-europ.]の最小のADの島名 Jamaïque よりも小さい島名であるのにADが付いているのだから、面積が[+europ.]の島名に有利に働いているように見えるし、後者にある島名は[+europ.]の最大のSAの島名 Chypre よりも大きい島名であるのにSAとなっているので、面積が[-europ.]の島名には不利に働いているように見えるからである。しかし、果してそれだけでよいであろうか。実は、もうひとつ考えなければならないことがある。それはα～γ間の[+europ.]のSAの島名、及びζ～θ間の[-europ.]のADの島名である。これらを考慮に入れて、その結果α～γ間では[+europ.]のADの島名が、ζ～θ間では[-europ.]のSAの島名が有意であるという場合にのみ、F<sub>1</sub> × F<sub>2</sub>の交互作用を認めようと思うのである。そうすると、α～γ間には[+europ.]のADの島名は6あるが、[+europ.]のSAの島名も3ある。また、ζ～θ間には、[-europ.]のSAの島名は9あるが、[-europ.]のADの島

名も 4 がある。従ってこれら 2 区間において、いずれも有意差はない。つまり、 $F_1 \times F_2$  の交互作用は効果として認められないということである。

$F_1 \times F_2$  と同じく、 $F_1 \times F_3$ 、 $F_1 \times F_4$  にも交互作用は認められなかった。残るは  $F_2 \times F_4$  と  $F_3 \times F_4$  であるが、 $F_2 \times F_4$  について次のような《表 7》を作った。これは、[±europ.] の 2 レベルと [mascul.] と [fémin.] の 2 レベル同志をそれぞれ組み合わせて AD と SA に分けて示したものである。

《表 7》	AD	SA
[+europ.] × [mascul.]	2	0
*[+europ.] × [fémin.]	12	4
*[−europ.] × [mascul.]	0	7
[−europ.] × [fémin.]	5	4

[+europ.] と [fémin.] といういずれも AD を取るように働くレベル同志の組み合わせで AD に有意差があり、[−europ.] と [mascul.] といういずれも SA となりやすい組合せで SA に有意差があるということは、 $F_2 \times F_4$  に交互作用がありそうなので、それを要因配置計画法によって判断してみると《表 8》のような結果が出た。

《表 8》	$F_2$	$F_4$	$F_2 \times F_4$
AD	主効果あり	主効果あり	交互作用あり
SA	主効果あり	主効果なし	交互作用あり

AD についても SA についても交互作用が認められているので、 $F_2 \times F_4$  には交互作用があると結論してよからう。ただ、 $F_4$  については、SA に主

効果が認められないので、 $F_2$  と  $F_4$  では、 $F_2$  の方が要因としての効果は大きいと言える。そして、

《表 9》	分析結果	
	$F_1$	効果なし
	$F_2$	効果あり ( $x^2 = 4.45$ )
	$F_3$	効果なし
	$F_4$	効果あり ( $x^2 = 3.92$ )
	$F_1 \times F_2$	交互作用なし
	$F_1 \times F_3$	交互作用なし
	$F_1 \times F_4$	交互作用なし
	$F_2 \times F_4$	交互作用あり
	$F_3 \times F_4$	交互作用なし

このことは単独の要因のところで出た結果と一致するものである。同様にして  $F_3 \times F_4$  についても吟味してみたが、交互作用は認められなかった。従って、交互作用が認められたのは  $F_2 \times F_4$  だけである。§2 で出てきた結果をまとめると《表 9》の通りである。この結果は言い替えるならば、島名の AD・SA の基準としては、[±europ.] と [mascul.] : [fémin.] が妥当であり、島名はそれが [+europ.] であり、かつ [fémin.] のとき最も AD が付き易く、逆に、[−europ.] であり、かつ [mascul.] のとき最も SA になり易いということである。そして、この [±europ.] と [mascul.] : [fémin.]

の重なり合った基準に依存するのが、出てくる例外を最も少なくする説明であると言えよう。

§ 3 島名の AD・SA に関する現代イタリア語との比較

§ 1、§ 2 で得られた結果から、現代イタリア語との比較において次の点が指摘できる。



### 〈類似点〉

- (i) l'île ～, l'île de ～, les îles ～, les îles de ～の型では、僅かな例外を除いて島名が SA で現れる。
- (ii) 群島名は常に AD が付く(但し、イタリア語には例外もある)。<sup>(注20)</sup>
- (iii) (i)の方が(ii)より優先する。
- (iv) SA の島名はどんな条件のもとでも常に SA で現れる。
- (v) AD の島名は条件によって SA にもなる。

フランス語：[+prép.][－mod.]で en, de の後。

イタリア語：①[+prép.][－mod.]で in, di, fra の後。②[+prép.][+mod.](但し、修飾語は島名の後)で in の後。

但し、フランス語の場合、en の後では常に SA となるが、イタリア語の場合、同じ条件の

①の in の後でも必ずしも SA とは限らない。fra と②の in には例外なし。

### 〈相違点〉

- (i) フランス語では、Crète は AD が付き、Madagascar は SA の島名であるが、イタリア語ではその逆になっている。
- (ii) AD の島名についてフランス語では de の後 AD に、イタリア語では di の後 SA に有意差がある。cf. (注12)。
- (iii) イタリア語には、《表5》に示したような、島名による「場所・方向」を示す前置詞の選択はないようである。

## 〔2〕 地名全体に関する考察

### § 1 Guillaume, G. の説

〔1〕 § 2 で島名の AD・SA の基準は一応得られたが、それでは、この結果を地名全体の AD・SA の基準にどのように組み入れてやればよいのであろうか。この問題に関して、Guillaume, G. (1975)は、地名全体における AD・SA の区別の基準についての興味深い意見を述べている。

“Les noms géographiques rentrent dans la catégorie des noms propres, avec des particularités de traitement, toutefois, qui ne sont pas dues à un caprice de la langue, mais à certaines propriétés de leur nature. Il y a lieu de les diviser en deux groupes: 1<sup>o</sup> ceux qui se présentent à l'esprit en étendue. Ce sont les noms de mers, rivières, montagnes, etc. Ils prennent tous l'article; 2<sup>o</sup> ceux qui se présentent sous la forme ponctuelle. Ce sont les noms de villes. Ils éludent l'article.”<sup>(注22)</sup>

(下線筆者)確かに、地名の大部分はこれで説明されるように思われる。しかし、島名についてはどうであろう。それを意識してかどうか、ここには、島名はいずれのグループにも上がっていない。それでも、国名や都市名と名前が一致している島名については説明がつくであろうが、それ以外の島名の方が遙かに多いのであるから、それだけでは不十分なことは明らかである。ところが、上記の文に引き続いて、彼は「場所・方向」を表わす前置詞の後の地名の AD・SA の区別についても述べている。ここに示されたもうひとつの場所の分割の概念に関する意見は、筆者の導き出した結果を地名全体に係わる AD の有無の基準に結びつけるための大きな指針を与えている。

“En soi l'idée de lieu offre à la pensée deux aspects: lieu intérieur, lieu extérieur.

L'opposition de l'un à l'autre étant catégorique, la langue avait à se poser le problème de leur répartition. Il semble qu'elle ait cherché un départ dans le sentiment d'éloignement. On relève, en effet, comme des traces d'une distinction fondée sur ce principe. ... Ce n'était point là quelque chose de satisfaisant. Un lieu a beau être éloigné, il n'en relève pas moins des aspects conceptuels du lieu: intérieurité, extériorité. Ainsi la répartition restait «en l'air». Or, de manière ou d'autre, il fallait que l'esprit la posât. Il fut ainsi amené à greffer les deux concepts locatifs sur l'opposition mécanique du masculin et du féminin.”<sup>(註23)</sup>

(下線筆者)彼の言う「へだたり(éloignement)」という場所の分割の概念の存在は、AD がラテン語の指示詞 ille に由来していることから考えられ得ることである。なぜなら、指示詞はそれ自体、遠近ということに係わっているのだから。また、現代フランス語において、[mascul.]:[fémin]の対立が、前置詞の選択(à か en か)と関係があることは、国名を見ればわかるし、島名についてもそうらしいことはすでに述べた。従って、その点でもこの意見は説得力があるのだが、これから示したいのは、少なくとも島名では、[intérieur]:[extérieur]という基準が、<sup>(註24)</sup> [—prép.]において AD・SA の区別の決め手になり、かつ [étendu]:[ponctuel]という基準<sup>(註25)</sup>に統合されるということである。

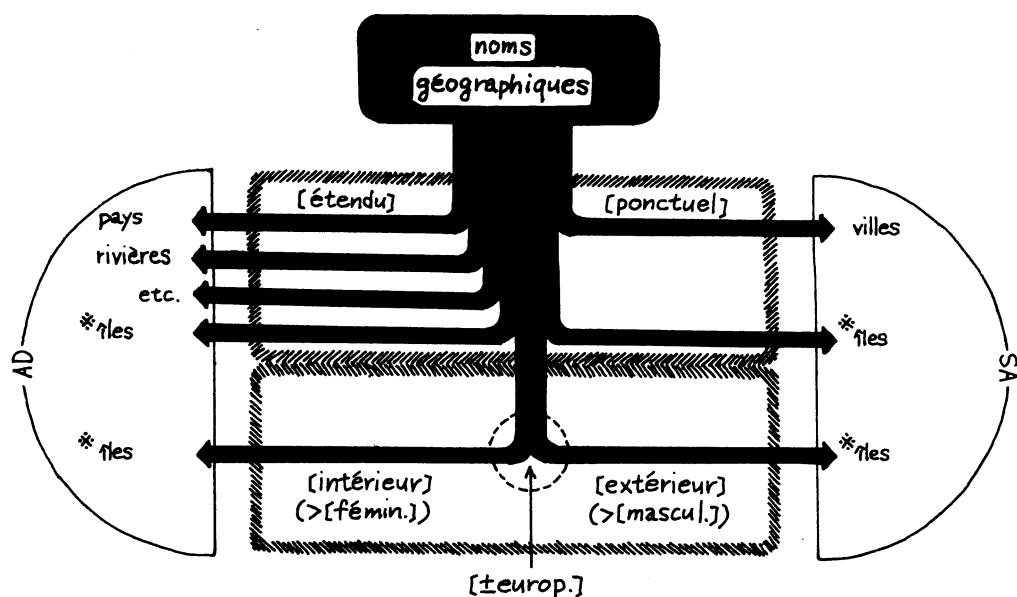
## § 2 島名の AD・SA の基準と [intérieur]:[extérieur], [étendu]:[ponctuel]

Guillaume は二様の場所の概念の対立を上げているものの、これら 2 つの対立の間の関係については述べていない。そこで、これまでの結果を総合して、地名全体における AD・SA の区別の仕組みの全体像を筆者なりに構築してみようと思う。

[1] § 2 で得られたごとく、島名の AD・SA の基準は [±europ.] と [mascul.]: [fémin.] の重なり合ったものである。とすれば、Guillaume の言う [intérieur]:[extérieur] を、島名の AD・SA の

基準と考えることができる。なぜなら、彼は[intérieur]:[extérieur]という対立は[fémin.]:[mascul.]という文法性の対立に結合されたと述べており、その[fémin.]:[mascul.]に筆者の得た結果と[intérieur]:[extérieur]との間の接点があるからである。更に、このことから[±europ.]という基準も、島名のみに関する[intérieur]と[extérieur]との境界と言うことができる。但し、この境界は統計的なものであるから、フランス人の意識の中に明確に存在するものではなく、現代フランス語における、ひとつの傾向であろう。フランス人が、個々の島について、それが[±europ.]のいずれであるかをいちいちはっきりと覚えているはずはないからである。さて、そこでもうひとつ考えなければならないのは[étendu]:[ponctuel]と[intérieur]:[extérieur](すなわち[fémin.]:[mascul.]+[±europ.])との関係である。結論から言えば、この両者は地名全体のAD・SAを決定する二重の基準ではないかと思われる。1次的なのが[étendu]:[ponctuel]であり、2次的なのが[intérieur]:[extérieur]である。従って、島名といえども国名や都市名と一致しているものは[étendu]:[ponctuel]のレベルで、ADまたはSAとされ、それ以外の島名は[intérieur]:[extérieur]によって、ADかSAと決定されるという仕組みである。このように考えれば、von Wartburg, W. & Zumthor, P. (1958)に述べられていることも、<sup>(註26)</sup>細かい点は別として、主要な部分は無理なく説明される。以上のことを本論の総まとめの意味で、図式化してみたい。島名だけについて言えば、上下左右に分かれた\*îleを合せたものが、島名に先立つAD・SAの全体の姿であり、それはそのまま、他の範疇に比べ島名のAD・SAの区別のメカニズムが複雑なことを示している。なぜ島名だけが、範疇内でAD・SAに分れるのかは、はっきりわからないが、この範疇が、他の範疇と共有する部分を有しているということは、その原因のひとつかもしれない。

〈図2〉



### Ⅲ 結 語

地名の AD の有無を心理的なものとして考えるとき、上記の図式はあくまでモデルにすぎず、その心理的実在は別問題であるにしても、[étendu]:[ponctuel] 及び [intérieur]:[extérieur] という二様の概念の対立は、ある程度人間の意識の中に存在するように思われる。しかも、両者が同じような心理的実在として。なぜなら、同じ場所であれば、「広がり」のあるものが、「点括的」なものより大きく見え、同じ広さのものなら、「近く」にあるものが、「遠く」にあるものより大きく感じられるのは当然だからである、従って、もし多くの文法書がそうしているように、「大きさ」という表現にこだわるならば、それは決して「物理的大きさ」ではなく「精神的大きさ」である。これは「親しみ」<sup>(注27)</sup>「近しさ」などと言い替えてもよいかもしれない。そして、この「親しみ」「近しさ」は従来 AD の基本的役割として考えられている「限定」とも本質的に無縁ではないように思われる。

最後に、ここにあげた結論は現代フランス語についてのみ言えるということを断っておく必要がある。他の冠詞を有する言語では、別の様相を呈するかもしれない。もともと言語の境界を越えた普遍的冠詞論には無理があるように筆者には思える。Christophersen, P. (1939) の Guillaume の理論に対する意見を見るとそれがよくわかる。そして、同じ Christophersen の言う「言語は人間活動それ自身であり、人間の心理と密接な関係にあるから、人間の心理状態を考慮に入れてはじめて説明できるものであり、従って、言語の法則も物理の法則のように厳密不変の法則ではなくてただ傾向の法則であり、統計上の平均にすぎない。」<sup>(注28)</sup>ということも忘れてはなるまい。

### 注

(注1) 本稿では、ロマンス語の中でも保守的なイタリア語との比較をしたい。現代イタリア語における島名の冠詞については、古浦敏生先生(広島大学文学部助教授)に御研究(『イタリア語における冠詞研究(2)―島の名前を中心として―』広島大学文学部紀要、第26巻2号、1966. pp. 146-161)があるので、参考にさせて頂いて、折に触れて、フランス語と比較してみた。なお、今後イタリア語以外のロマンス語との比較も試みてみたい。

(注2) pp. 54-55。

(注3) p. 342。

(注4) cf. von Wartburg, W. & Zumthor, P. (1958): pp. 285-286, Martinon, Ph. (1927): pp. 52-53。

(注5) Pernet, L.: Géographie VI, V, IV, III (1970-1973), Hachette, Paris; Gourou, P. & Papy, L.: Cours de géographie II, I, CLASSES TERMINALES (1962-1966) Hachette, Paris。これらの資料は平田嘉三先生(広島大学教育学部教授)の御好意により

拝借したものである。

(注6) 本稿では、帰無仮説の帰棄値を3.84(5%の有意水準)とし、必要な場合は、連続性に対する補正を行った。これらの検定法については、『統計の基礎』(サイエンスライブラリ統計学11, サイエンス社, 1978), 『推計学のすすめ』(佐藤信, 講談社ブルーバックス116, 1977)などを参照のこと。

(注7) (i)~(ii)はいずれも同格なので SA で現れると考えられる。(ii)と(iv)の de は同格名詞を導く虚辞の de である。イタリア語では、この de に当たるものを「細記の(specificativo)」di と言い、この di の後では SA になるようである。これについては Migliorini, B. (1957) Firenze, pp. 156-157 を参照のこと。(i)~(iv)において SA で現れた島名は次の通り。(i) Bikini, Fumante, Guam, Kerguélen, Maurice, Nauru, Nouvelle-Amsterdam, Oléron, Ré, Saint-Paul, Saint-Pierre, Salomon, Sakhaline, Victoria, Wake, (ii) Baffin, Bornéo, Elbe (cf. Anglade, J. (1930) p.55), Jade, Java, Luçon, Madagascar, Nam, Noirmoutier, Oléron, Ouessant, Ré, Rhodes, Sein, Tasmanie, Wight, Yeu, (iii) Åland, Anglo-Normandes, Australes, Bahamas, Baléares, Britanniques, Carolines, Comores, Cook, Falkland, Far-Oer, Fidji, Frisones, Gambier, Gilbert, Hawaï, Hébrides, Kerguélen, Kouriles, Lipari, Lofoten, Loyauté, Mariannes, Marquises, Orcades, Pélagi, Phoenix, Ryukyu, Salomon, Samoa, Scilly, Shetland, Tonga, Touamotou, Toubouai, Vesterålen, Wallis et Futuna, (iv) Nouvelle-Sibérie。例外は(ii)の型では la Guadeloupe, la Martinique, la Nouvelle-Calédonie, la Réunion, (iv)の型では les Antilles, La Ligne, la Nouvelle-Sibérie, la Société である。

(注8) 例えば, Au Sud, s'égrènent les Petites Antilles comme la Guadeloupe, la Martinique et Trinidad. という島名の並挙の文において, Guadeloupe, Martinique は[-prép.][-mod.]で AD であるとわかっている。もし仮に, Trinidad が AD の島名とすれば, 同じ条件にある Guadeloupe, Martinique のように AD で現れるはずであるが, 実際には SA になっている。そこで, Trinidad が AD の島名だとすると矛盾を起こすので, SA の島名とするわけである(fr. Trinité は AD だが, ここでは資料通り Trinidad を優先)。

(注9) cf.《表6》。

(注10) 島の面積は『ブリタニカ国際大百科事典』(ティビーエスブリタニカ社)を中心にして調べ, 部分的に Petit Robert 2 も使用した。面積の数値は参照する書物によって多少異なり, 完全に一致する方が稀であるが, その場合, 前者を優先させた。なお,  $F_{1-4}$  の F は要因(facteur)を示す。

(注11) 例えば, [-europ.][+franç.]という組み合わせは考えられない。詳しい吟味の方法は本稿Ⅱ

[1] § 2(2)を参照のこと。

- (注12) de の例は全部で92例で、AD : SA = 73 : 19であった。von Wartburg, W. & Zumthor, P. (1958) p. 258では、[fémin.]の島名について“L'article tombe après de et en : il vit en Sicile ; il vient de Corse”と述べられているだけである。en については問題ないが、de については、上記の例とは de の意味は異なるのであるが、AD の付く例(ex. une partie de la Corse, le relief de la Corse)があることには触れられておらず、明らかに不十分である。なお、イタリア語では、di の後で同様の現象があるが、(注1)の論文によれば、フランス語とは逆に SA に有意差がある(AD : SA = 34 : 70)。そして、一見同じ用法のように見える de と di の場合でも、AD の有無の一致しない例がある(ex. fr.: la relief de la Corse, ital.: allo scoglio di Sicilia ((注1)の論文 p. 160))。cf. (注14)。
- (注13) 例えば、(注12)に示した AD の付いた例と SA の例など。
- (注14) 例えば、(注12)に示した AD の付いた例と次のような例。ex. Les côtes de Provence et de Corse sont rocheuses et élevées., Un village de Corse.
- (注15) de の後の AD の有無は本当に複雑である。朝倉(1980) p. 52を見ると「島の名は国名に倣って冠詞をとり…」となっており、このことからすれば、国名と AD の付く島名とは、統語上は同じように扱われると考えられる。しかし、次の例では、「～のうちで(最も…)」という意味の同じ de の用法であるにも拘らず、国名の France は SA であるが、島名の Martinique には AD が付いている。ex. 国名 :cette ville est devenue le centre industriel le plus important de France.; 島名 :Fort-de-France est le chef-lieu et la plus grande ville de la Martinique.。筆者が調べた国名は France だけであるが、この de の用法の場合、すべて SA であった。この違いについては、もう少し考察の余地があろう。
- (注16) p. 343。
- (注17) pp. 16–17。
- (注18) p. 53。
- (注19) 例えば、朝倉(1980) p. 16–17において、大きいから en をとるとなっている Corse より、小さいから à la になるとなっている Jamaïque の方が、面積は広い(cf. 表 6)。
- (注20) ex. Palaos (cf. (注1)の論文 p. 151)。
- (注21) ex. Una flotta...fomentò nella Corsica. (cf. (注1)の論文 p. 160)。
- (注22) p. 290。
- (注23) p. 291。これに対し、cf. Brunot, F (1953) p. 169。
- (注24) (注23)の引用個所で、lieu intérieur : lieu extérieur 或は interiorité : exteriorité という表現で示されている(「へだたり」という感覚に関する)場所の概念の対立を、AD : SA の

基準として、このように示すことにする。

(注25) (注22)の引用個所で、*en étendu : sous la forme ponctuelle* という表現で示されている場所の概念の対立を、AD : SA の基準として、このように示すことにする。

(注26) p. 285。

(注27) 「親しさ (*familiarité*)」ということを取り入れている冠詞論には、Christophersen, P. の *Familiarity-Unity Theory*, Haislund, N. の *Theory of Stages of Familiarity* などがある。Christophersen, P. (1939) p. 5及び p. 70によれば、「親しさの学説」は古くからあり、また広く信じられているもので、有力な代表的学者のひとりに Hansen, Aa がいる。なお、*familiarity* という語は Brown, G. (*The Grammar of English Grammars*. New York (1861) p. 288)によって用いられた。

(注28) cf. Christophersen, P. (1939) pp. 15–17。

## 参 考 文 献

Anglade, J. : *Note sur l'emploi de l'article en français*, Toulouse, 1930

朝倉季雄：『フランス文法事典』白水社，1980

Brunot, F. : *La pensée et la langue*, Paris.1953

Christophersen, P. : *The Articles*, Copenhagen. 1939

Grevisse, M. : *Le bon usage*, Paris. 1980

Guillaume, G. : *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Paris. 1975

一色マサ子：『冠詞』研究社．1980

Martinon, Ph. : *Comment on parle en français*, Paris. 1927

松原秀治：『フランス語の冠詞』白水社．1978

田辺貞之助：『現代フランス文法』白水社．1978

von Wartburg, W. & Zumthor, P. : *Précis de syntaxe du français contemporain*, Berne, 1958